



制作者あいさつ

モニュメント制作者
東京藝術大学 准教授
小谷 元彦

撮影：根本匠

この仕事をするにあたって1番気をつけたことは、公共空間の中に彫刻を置くということです。彫刻は、国内外のいたるところに設置されていますが、時間とともに人の意識の外に放置され、風景化されてしまいます。いい彫刻というのは、公共空間の中でも時間を超えて、何かしら人の記憶に残すものであると思っています。

ギリシャ彫刻の発祥地オリンピアではオリンピックにまつわる彫刻が作られるなど、実は古くからスポーツと彫刻は歴史的に近い関係にあります。現在オリンピアの彫刻は部分的に失われ、残った身体だけがフレームに支えられながら置かれています。4万年前の宗教と彫刻の関係の始まりと言われる「ライオンマン」を踏まえて、超人間を表現したいと考えました。

最初はお題に対し、どう形にするかが難しく、実際に大分で開催された試合も拝見しました。未来派の彫刻のように肉体の動きが連続写真のように感じただけでなく、テレビと全く違うと感じたのは、ディフェンスの肉体の壁からある選手が突破する瞬間でした。その瞬間の空間は知覚的に何か特別なものに見えました。私には、突破した先は重力が解き放たれた別世界で、駆け抜ける人間が獣性を帯び、人間を超越したように変化して見えました。

この制作を始めてから新型コロナウイルスが流行し、社会が閉塞空間（密）から離れていくようになりました。閉塞空間から突破するのは新たな世界、新たな人間であるということは現在の社会状況を予言しているようにも感じ、コロナウイルスとモニュメント制作は必然の関係をもって生まれてきたと思っています。世の中の情勢を、制作に時間がかかる遅いメディアの彫刻で表現することはとても難しいことですが、ラグビーを通じて、様々な要因を含めて表現できたということは、自身にとっても実り多きありがたい機会でした。

このモニュメントが多くの方に祝福され、各人の記憶に残っていく物になることを期待しています。



設置場所:大分市荷揚町(昭和通り交差点)



ラグビーワールドカップ 2019™日本大会大分開催 記念モニュメント

The Lionman

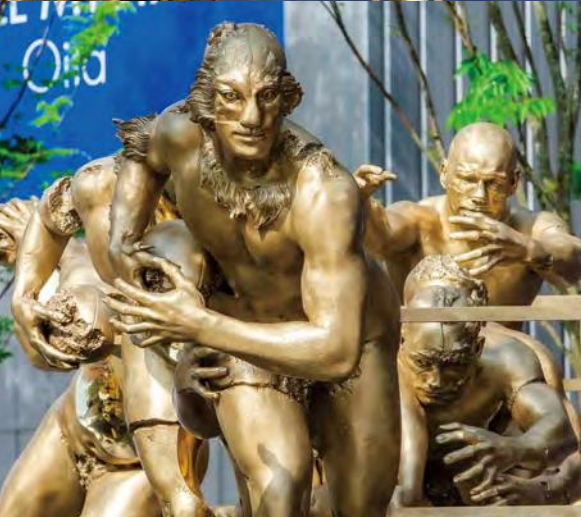
～ラグビーワールドカップ 2019™の感動と興奮の継承～

One Rugby, One Oita 推進委員会・大分県

ラグビーワールドカップ 2019™
日本大会大分開催 記念モニュメント

除幕式

令和3年4月17日(土)



ごあいさつ



One Rugby, One Oita
推進委員会会長

大分県知事

広瀬 勝貞

今日こうして、ラグビーワールドカップ2019日本大会の立役者、そして大分県のラグビー界の有力者のお顔を拝見すると、あの時の興奮がよみがえります。大分県では、予選プール3試合、決勝トーナメント2試合が執り行われました。これは、東京、神奈川に次ぐ試合数です。さらに、来県したチームは、ニュージーランド、オーストラリア、フィジー、ウェールズ、イングランド、フランスといった強豪国です。昭和電工ドーム大分での力溢れる試合に興奮するとともに、ラグビーの持つ品位、情熱、結束といったスピリットを共有することができました。

また、場外でのホスピタリティもすごいものでした。多くのボランティアが大会を支え、それより多い県民が、言葉が通じなくても、おもてなしの心で接することで、お互いの理解が深まりました。そして、グローバル時代に大事な外国の客人との交流に自信を深めることができました。

そこで、この感動、誇り、自信を形に残したいと思い、大分県が誇る彫刻家の朝倉文雄先生と縁のある東京藝術大学の小谷元彦准教授にモニュメント制作をお願いしたところ、素晴らしい出来栄えのモニュメントが完成いたしました。皆様方にもたっぷりご覧いただければと思います。

ラグビーワールドカップ日本大会大分開催には、御手洗富士夫組織委員会会長、森重隆日本ラグビー協会会長はじめ、本当に多くの方々にお力をいただきました。そして、このモニュメントの設置についても、また多くの方々にお世話になりました。皆様に、あらためて心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

メッセージ



元ラグビーワールドカップ
2019組織委員会会長

キャノン株式会社

代表取締役会長兼社長 CEO

御手洗 富士夫

このモニュメントは、ラグビーの長い歴史において、ワールドカップが、アジアで初めて日本で開催されたこと、その中で大分県が飛び抜けて重要な役割を果たしたことを表す、大変に重要な意義を持つものだと思います。大分では、5試合が開催され、何十万人もの観客が訪れました。そしてその大半は、海外や県外からいらっしゃった人々で、大分の名前が、世界中に広く知られました。

大分での試合開催をお支えいただいた、県や市、大分県ラグビーフットボール協会、ボランティアの方々をはじめとする全ての皆様に、組織委員会を代表して、御礼を申し上げます。

また、私は、このモニュメントが、百年ぶりのパンデミックのさなかにお披露目されることにも、大きな意味があると感じています。

ラグビー日本代表のスローガンは、ワンチームでした。この言葉は、出身地や文化、様々な背景が違って、目標に向かって一致団結し、その違いを乗り越えて一つになる、という意味合いを持っています。

今はまさに、コロナウイルスに打ち勝つため、家族、友人、社会、そして全世界がワンチームとなつて、前へ、前へと、進んでいかねばならない時と言えます。ラグビーは、世界平和につながる崇高な精神性を持っています。それを形にして表現するモニュメントが、ここ大分の中心に、百年、二百年、何百年と大いなる存在感を発揮して、未来の若者たちの目に触れ続けることを思うと、誠に感慨深いものがあります。

最後に、素晴らしいモニュメントをご準備いただきました、東京藝術大学の深井隆先生をはじめとする設置委員の皆様、制作者である小谷元彦先生に、深甚なる敬意と感謝を表しまして、挨拶いたします。



公益財団法人

日本ラグビーフットボール
協会会長

森 重隆

ワールドカップ日本大会が終わりもう1年半が経ちますが、あの感動の数々はつい先日のように思い起こされます。大分県にはニュージーランドを始め、オーストラリア、ウェールズ、イングランドと名だたる世界の強豪国が相次いでキャンプ入りし、大分県の方々が日本を代表して、おもてなしをしていただきました。そして4万人の観客を飲み込む、あの昭和電工ドーム大分で予選3試合、準々決勝の2試合、計5試合が行われ、日本中、世界中の方々がそのゲームと大分県のおもてなしに盛り上がりました。

期間中には17万3千人の方が会場で観戦し、11万5千人の方がファンゾーンで熱烈な応援をしていただきました。日本代表の躍進とともに、大分県もワンチームとなって大会をおおいに盛り上げていただきましたことに、改めて感謝申し上げます。

この記念モニュメントは大分開催のレガシーを残し、ラグビースピリッツを象徴する大きなシンボルだと思います。私もラグビーフットボール協会は選手だけでなく、それを見る方、支えてくれる方々ともワンチームとなり、活発な地域活動が沸き起こることを期待しています。そして今後もこのラグビーというスポーツを通じて、一層の貢献をしていく所存です。ラグビーが今こそ地域の皆様方に元気と活力を与え、仲間を思い、感動の機会を増やすことができますよう、益々力をいれていく覚悟で臨んでまいります。



ラグビーワールドカップ2019
日本大会大分開催
記念モニュメント設置委員長

東京藝術大学 名誉教授

深井 隆

2019年のラグビーワールドカップ日本大会は、日本代表の大活躍もあって日本中が大いに盛り上がりました。ここ大分でも、準々決勝2試合を含む熱戦が開催された事は記憶に残るところです。

これを記念して、モニュメントが作られる事になり、関係各位が委員となって委員会が開かれました。会議では多くの真摯な議論がなされました。ここに彫刻が立派に設置されました事は、委員として大変嬉しく思います。

制作者の小谷元彦さんは、世界的な展覧会、イタリアのベネチアビエンナーレに日本代表として選ばれ、また東京六本木、森美術館での個展など数々の輝かしい経歴を持つ、日本を代表する彫刻家です。ここに設置された彫刻は、ラグビーの激しく戦う様が躍動感あふれる姿で表現されています。

また、小谷さんの彫刻哲学が込められ、新しい技法を取り入れるなど素晴らしい力作になっています。私は21世紀を代表する野外彫刻として、今後評価されるものになるに違いないと確信しています。

最後に、大分県民の皆様、この記念モニュメントが末長く愛される事を祈念して、挨拶いたします。

